

(1) 各コースの教育

① 学校教育実践研究コース

(学校経営・学校心理)

ア 組織

令和4年度より学校教育高度化専攻学校教育実践研究コース3領域のうち学校経営・学校心理領域として発足した。学校経営・学校心理領域は、教育学と教育心理学の領域から構成されており、令和4年3月時点でのスタッフ構成は教授6人、准教授4人である。大学院教育においては、「専門志向より問題志向」という大きな方針を掲げ、学問分野の垣根をできるだけ低くして、院生が問題への様々なアプローチを自由に選択できる組織体制を整えてきた。

イ 教育の特色

学校経営・学校心理領域では、教師と子供・地域社会との連携や、初等教育から高等教育までの移行を支える発達という視点に立って、教育学と教育心理学の立場から、教育の在り方について専門的に追究する。この趣旨から、教育と子供の発達を俯瞰できる広い学識に基づいて、多様な教育の運営をデザインしコーディネートできる高度な実践的力を備えた教育者の育成を目的としている。学校という枠を超えて、様々な関係者・諸機関と協働、連携することが不可欠となっている現代の教育課題に対応するカリキュラムを提供するところに特色がある。

ウ 運営・活動の状況

i) 領域会議等の開催状況

教員の多忙化を避けるため、月1回の領域全体での会議や課題に応じた作業部会、メール審議、緊急案件がある場合には臨時会議を開催するなど、柔軟な会議運営を行った。それとともに、メーリングリストを活用して協議や意見聴取、議事録確認を行うなど、意思決定の効率化と協議内容の共通理解の促進を図った。

ii) 審議された主な事項

教育課程、学校支援プロジェクトや学校支援フィールドワーク、指導に関わる教務事項、入試、コロナ禍における学生指導等を中心として協議した。特に、学校支援プロジェクトに関する科目の内容、実施手続き、実習とリフレクション、プレゼンテーション、1年制プログラムの運営、フォローアップセミナー、入試と定員充足の方策、コロナウイルス感染症予防に関わる教室運営等が重要案件となった。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

領域のホームページの活用や大学訪問、派遣元の教育委員会訪問、入試説明会等によって領域をアピールすると同時に、入試合格者に対する領域の案内や資料の送付によって入学者の確保に努めた。また学生や各機関に対して本領域へのニーズを聞きカリキュラムに反映させるよう改善を図った。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

専門職学位課程への移行からの4年間は、それまで修士課程で培った研究と実践の往還バランスを学校実習中心の往還へと大きく組み換え、令和3年度に引き続き今年度もその実現に努めた。具体的には、学校実習を核とする問題志向の実践・研究能力養成を実質化していくため、研究成果発表会、構想発表会、

中間発表会の位置付けを再検討し、共通理解を図った。

特に、領域での指導体制を整えるために、当該領域単位での3ポリシーを意識し、科目の内容構成、担当者、学校支援プロジェクトの進め方などの共通理解を図った。こうした共通理解に基づき担当者間やアドバイザー間の連携・協働を強化することに重点を置いた。学校実習に関してもアドバイザー間の協働を進め、同一校に異なるアドバイザーの院生が実習に入る場合でも、アドバイザー間あるいは相手校との連絡を密に連携し院生がスムーズに学校支援を行えるよう促した。さらに、フォローアップセミナーは在籍生にも企画に参画してもらい、修了生、在籍生がともに学び続けるための必要な工夫を図った。

エ 優れた点及び今後の検討課題

学校経営・学校心理領域は、現代の学校・家庭・地域における諸問題に対応する教育研究体制を整えている。特に、他の教員養成系大学・学部や本学のこれまでの教育組織にはない新しいコース・カリキュラムを提供しており、「社会に開かれた教育課程」、「チームとしての学校」、「カリキュラム・マネジメント」等に直結する学問的・実践的探究に取り組むことができる点で卓越性がある。とりわけ令和4年度は、これらカリキュラムのうち1年制プログラムの運営を強化して担当者間の協働を図ると共に、本プログラム受講生以外の院生にも「教育経営プロフェッショナル」として応分の科目履修を証明する領域内規程等を整えた。さらに学校実習中心の研究・学修を踏まえ、フィールドワーク・リフレクション・プレゼンテーションの関係、個人研究、共同研究等のあり方や指導スケジュールを再確認し、各教員の共通理解と指導の一貫性を図った。

今後の課題として学校実習中心の研究や学修の在り方をさらに工夫改善すること、定員充足を図るための方策の工夫として大学訪問、教育委員会訪問に加え、領域ホームページの拡充・ソーシャルメディアへの発信や教育委員会と連携した履修プログラムの検討等があげられる。

(学級経営・授業経営)

ア 組織

学級経営・授業経営領域の令和4年度における教員構成は、教授9人、准教授2人、特任教授1人の計12人である。

本領域(2年・3年は教科教育・学級経営実践コース)在籍者数は、1年次学生50人、2年次学生59人、3年次学生5人である。また、本コースと連携する機会のある学部の「学校教育実践コース」の在籍者数は、2年次学生30人、3年次学生30人、4年次学生30人である。

イ 教育・研究の特色

本コースは、教科教育実践と学級経営実践の2つの研究・教育領域を往還する教育・研究指導を行っている。その教育・研究指導では、学校現場と連携し、その学校の教育改善を実現する過程で、学生指導を行っている。

本領域に所属する学生は、中長期の教育実習をコアとしたプロジェクト科目群を中心とした教育を受けている。プロジェクト科目群では、組織的な事前・事後指導はもちろん、教育実習中も組織的な指導を行う。また、年間を通じて、常に実習校と連携をとり、実習が実習校の教育改善につながるような計画立案と改善を継続的に行っている。その中で、学生と学校の課題意識に基づき、チームとしての追求課題を深め、その成果を学校現場に還元する。

平成21年度より始まった学士課程の教育活動に関しては、専門職学位課程の教育活動と連携を進めている。連携する学校単位で、その成果を発表する場を設けている。さらに、地域に対する発表の場を設けている。このような場を通して、学生・教員集団の相互理解、相互乗り入れを図るのみならず、地域や学校との相互理解、相互乗り入れを発展させ、共有化する工夫を行っている。

ウ 運営・活動の状況

i) 領域会議等の開催状況

ほぼ隔週で領域会議を開催し、本領域の運営に関する重要事項について協議している。さらに、必要に応じて一つのテーマに絞って臨時領域会議を開催している。

ii) 審議された主な事項

本学改革に向けての取組。新領域での取組、人事、カリキュラム等。

コロナ禍における学部生、院生の学修を保証するための授業方法、領域事業の検討

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学主催の大学院説明会以外に領域主催の説明会を開き、積極的に大学院定員充足に努めている。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

定員充足のための様々な試みを検討し実行した。その結果、全学の定員充足に大きく貢献した。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

本領域の優れた点としては、教職大学院開設時より少ないスタッフにもかかわらず、本学の定員充足に抜群の成果を上げており、大きく貢献していることが挙げられる。

今後の課題としては、教職大学院開設より今までの成果を再検討し、さらなる教育の改善や、学生に対する就職支援の一層の充実などを行わなければならない。

そのためにも、教育・研究環境の整備が不可欠であり、教員の適正な人事配置と均衡のある職階構成が望まれる。

(道徳・進路・生徒指導)

ア 組織

道徳・進路・生徒指導領域は、令和3年度の改組における教職大学院の拡充に伴い学校教育高度化専攻学校教育実践研究コース道徳・進路・生徒指導領域として設置された。スタッフの構成は、学校教育相談論の教授1人、特別活動論の教授1人、キャリア教育論の教授1人、生徒指導論の講師1人である。

本領域在籍者数は、1年次学生6人、2年次学生8人、3年次学生7人である。また、本領域と連携する学部の「道徳・生徒指導領域」の在籍者数は、2年次学生10人、3年次学生8人、4年次学生9人である。

イ 教育の特色

本領域は、「臨床的・実践的な教育研究活動を通して、規範意識や道徳性の育成をはじめ、生徒指導上の今日的課題である不登校やいじめ問題等の予防及び対応と良好な人間関係づくり、望ましい集団活動や教育相談による発達支援、児童生徒個々人のキャリア形成や生き方・在り方を考えるための指導や援助の方法などを探究し、専門的職業人として活躍できる教員を養成」をコンセプトとしている。「考え議論する道徳」の具体化をはじめ、生徒指導上の今日的課題であるいじめの問題や不登校問題への予防や対応、生徒個々人の自己受容・他者受容・グループコンセンサス能力の育成と良好な人間関係形成や学級づくり、望ましい集団活動を通じた社会性の育成、自分の生き方・在り方を考えるためキャリア形成の指導・援助などを理論的・実践的に追求している。こうした臨床的・実践的な教育・研究活動を通して、道徳や進路指導・キャリア教育と生徒指導などにおける予防的・開発的な支援活動の実践を前提とした学校支援プロジェクトへの取り組みを踏まえたチーム研究、並びに独自の研究テーマに即した個人研究を指導・支援している。特に大学院の個人研究では、学生の出口保障という意味合いで、領域独自に学会ないし大学の研究紀要への投稿論文相当の論文作成を課している。

ウ 運営・活動の状況

i) 領域会議等の開催状況

前期・後期に各2回行われる定例会議及びメール審議で教育・研究に関する事項を協議し決定した。その他、必要に応じ随時会議を開き、教員間のコンセンサスを図った。入試や研究指導、学校実習への取り組みなどを領域の全教員で行うなど、円滑に運営されている。

ii) 審議された主な事項

運営体制及び教育・研究体制に関する様々な部分で、前述の通り教職大学院に移行したことでの課題を効果的に行えるよう学年進行に合わせて調整するなどしている。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

領域として独自の大学院入試相談会や合格者の学修成果発表会への参加などを企画・実施した。また、大学等の訪問を積極的に行った他、領域の案内ポスター等を作成して、大学訪問時・各教員が講師を務める教員研修会に持参し掲示を依頼する等している。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

学校実習(学校支援プロジェクト)を円滑に進めるため、全教員が領域会議等において情報共有を密に行い、リフレクションやプレゼンテーションの在り方や内容、評価などについても議論を深めている。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

多様な研究領域を専門とするスタッフが、学校(私立を含む)現場のみならず教育委員会、学会活動や各種研究会などと連携しながら教育実践研究に取り組んでいる。

研究指導等に関しては、スタッフ間の垣根を取り払い、学生が自由にアドバイスを得られるような体制を作り上げている。今後も教育・研究における学生指導体制の充実・強化を目指す必要がある。また、学校現場の教育研究活動の一層の充実を引き続き支援し、教育実践研究の優れた成果を効果的に発信することで、学生定員確保の方策のひとつとすることが挙げられる。

② 教科教育・教科複合実践研究コース

(人文・社会 国語)

ア 組織

国語分野は、国語科教育、国語学、国文学（古典文学）、国文学（近代文学）、漢文学、書写書道の6つの研究領域により構成される。

令和4年4月1日現在の国語の構成員は、教授4人、准教授1人、講師1人、助教1人の計7人である。教授のうち1人は、副学長として全学の運営に貢献している。領域としてみたとき、漢文学の専任の教員は不在となっている。

イ 教育の特色

学部学生・大学院学生ともに、先に挙げた国語科教育、近代文学、古典文学、国語学、書写書道（漢文学は除く）の各領域に所属している。在籍学生は、学部2年生12人、3年生11人、4年生12人、大学院修士課程1年生6人、2年生以上8人である。指導の具体は、国語分野として共通して必要とされる資質・能力を育成するとともに、各領域における指導を中心としつつ、複数領域での指導を柔軟に行っている。卒業論文と修士論文の指導に係る構想発表会・中間発表会は全領域合同で行い、領域にかかわらず相互に議論が展開されている。

また「上越教育大学国語教育学会」を組織しており、例会では、卒業・修了生の発表、卒業論文・修士論文の発表及び教員の研究発表を行っている。令和4年度で76回を数え、例年、修了生・卒業生を含む学外からの参加者も少なくない。学会誌として年1回のペースで『上越教育大学国語研究』を刊行している。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

分野会議は、定例の会議および臨時の会議をあわせ、計16回開催した。

ii) 審議された主な事項

主たる審議内容は、分野の運営・人事計画と今後の教育の方針、特に令和4年度改革におけるカリキュラムの具体的な内容および学校実習等のあり方の検討、修士論文・卒業論文の指導方法、附属学校（国語科関係）との連携、分野の広報活動、大学院定員充足の方策、入試に関する事柄、「上越教育大学国語教育学会」の運営方針・同学会誌の編集、学生動向等である。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組として、他大学への訪問等によって大学院紹介を行っているが、今年度は主に郵送・e-mail、オンラインによる対応となった。なお、国語分野からは他大学の教員・役職員を複数輩出しており、国語分野の教員と修了生との関係を生かし協定の締結に貢献してきたが、その関係を生かした取り組みを継続している。加えて、合格者へ対応として、分野紹介や学修指導に関する資料の送付を行うなど、積極的に周知広報に努めている。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

学校支援プロジェクトを円滑に進めるため、教員間で情報共有を密に行い、リフレクションとプレゼンテーションの在り方やその方法、評価等についての共通理解を深めることに努めた。また、コロナウイルスの感染対策下における効果的な指導を意識し、学生に対しては感染拡大防止のために健康観察等を促し、丁寧な支援を心がけた。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

これまで、学生の教育・研究指導において分野内の領域を横断した体制を組織してきた。本年も、教科教育と教科内容とを効果的に結びつける構造に配慮している。学部の授業としての「教科内容構成「国語」と、大学院における「教科内容構成特論「国語」とについては、継続して充実を図り、これらにおいて蓄積した成果

を、今後の教育・研究活動に生かしていくことが重要だと考えられる。また、学校支援プロジェクト（学校実習）においても、各教員の専門性をいかすとともに、複数の領域やチームを横断して学生が自由に指導・助言を得られるような体制をつくり、必要に応じて、アドバイザー間で連携した学修指導を行うなど、教育・研究における学生指導体制の充実・強化を図っている。

学部卒業生・大学院修了生の学業成績や教員採用状況も高い水準を維持した。さらに中学校および高等学校の教員免許状国語の取得を希望する学生が60名程度ときわめて多く、そのレベルを落とすことのないよう個別の対応もおこないながら、本学学生の複数免許の取得に貢献している。

今後の課題としては、学校支援プロジェクトの充実を図るとともに、学生個々のニーズに対応した学修指導の在り方を工夫することがあげられる。定員充足や地域貢献、本学全体の改革に的確に対応しながら、現代の教育にふさわしい、より充実した分野の運営をめざしていきたい。

（人文・社会 英語）

ア 組織

令和4年4月1日現在の人文・社会領域（英語分野）の構成員は、教授2人、准教授2人、講師1人、助教2人の計7人である。令和4年度は、大学院改組により募集を行わない先端教科・領域開発研究コース（小学校英語領域）から教授1人、助教1人が加わり、英語教育分野を担当する教員が増え、英語教育における指導が強化された。

イ 教育の特色

人文・社会領域（英語分野）は、英語教育学、英語学、異文化コミュニケーションの3つの教育研究領域により構成されるが、それぞれの領域について、専門的かつ包括的な教育研究指導を行っている。

大学院においては、令和4年度の改組により専門職学位課程となり、英語教育に関する指導力・教科専門性・実践的スキルを併せ持った人材の育成を目指している。令和4年度は15名が入学し、学校支援プロジェクトに向けて、プロジェクト科目による実践的な指導を受けている。実習校との綿密な調整により、実習校の課題解決や教育改善に役立つような計画と実践をチームとして行っている。令和4年度においては、新コースの院生は先端教科・領域開発研究コース（小学校英語領域）の学生と合同チームを組み、学校実習を行った。また、修士課程に在籍する2～3年生のうち最終学年の院生は、4月の修士論文構想発表会と10月の修士論文中間発表会、そして翌年2月に修論発表会を実施し、全員が無事論文を提出した。また、先端教科・領域開発研究コース（小学校英語領域）に在籍する2～3年生の3名が学修成果報告書を提出し、審査を経て無事に修了した。

一方、学校教育学部では、英語の基本的な力を身につけさせるとともに、小学校での英語教科化など学校現場の変化や社会のニーズに対応できる能力の育成を目指している。令和4年4月1日現在の学部在籍学生は、教科内容構成コース（英語）は2年生8人、3年生8人、4年生8人であり、また先端教科・領域学習コース（小学校英語領域）は、3年生6名、4年生5人であった。11月に卒業論文中間発表、令和5年2月に卒業論文発表会を開催した。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

令和4年度は、ほぼ月に1度のペースで開催した。緊急に協議が必要となった場合は、臨時の会議も行ったが、メールでの審議も活用して柔軟に行った。教育や研究に関する事項を協議・決定し、円滑に運営することができた。

ii) 審議された主な事項

審議した主な内容は、①入試関係について、②予算について、③各種委員会委員について、④学生指導

と動向について、⑤人文棟改修工事に伴う研究室移転等についてであった。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組の状況については、新たに人文・社会領域（英語分野）の学生募集に関して専門誌『英語教育』に広告を掲載し、英語分野リーフレットを作成し広報に努めた。また、各教員が学会等の教育研究集会や出前講座、ワークショップにおいて人文・社会領域（英語分野）についてのPRを行った。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

令和4年度は大学院改組のため専門職学位課程になり、先端教科・領域開発研究コース（小学校英語領域）との兼務を行う2名と修士課程の学校教育深化コース（文理深化領域 英語分野）との兼務を行う5名が合流したことで、7名の教員による運営体制となった。専門職学位課程では、新旧コースの大学院生が協同して学校支援プロジェクトに参加し、臨床力、即応力および協働力を高めることができた。学部生の指導に関しては2つの領域に分かれており、卒業論文の中間および最終発表会もそれぞれで行っているのが現状である。

また、近年、英語の免許を取得すると教員採用試験で有利になる自治体が増えていることに加え、新カリキュラムの導入により英語免許関連科目を受講する他コースの学生・院生が増加していることから、その対応については引き続き改善が求められる。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

学部生・大学院生の教育・研究指導に関しては、学部4年生13人、最終学年の院生7人が卒業・修了に必要な単位を取得し、修士課程は論文を、専門職外課程は学修成果報告書を完成させ、卒業・修了することができた。教員採用等でも大きな成果を挙げることができた。専門職学位課程においては、15名の入学者があり、定員充足には貢献できたのではないかと思う。また、学校支援プロジェクトにおいては、学校現場と連携を取りながら、今日的な教育課題に対応した支援を実施することができた。

令和4年度は、専門職学位課程に改組され、また人文棟3階の改修工事もあり、「上越英語教育学会」の年次大会を実施することを見送った。開催については次年度以降検討していきたい。しかしながら、小学校外国語のための免許法認定講習はオンラインで実施することができた。

専門職学位課程に改組されたことにより、英語の教員は、教科教育・教科複合実践研究コース（人文・社会領域 英語分野）と修士課程、あるいは教科教育・教科複合実践研究コース（人文・社会領域 英語分野）と先端教科・領域開発研究コース（小学校英語領域）に所属している。新旧のカリキュラムが並行する中で、各教員が専門職学位課程においてどのように教員養成に係わっていくかが引き続き課題となる。

（人文・社会 社会）

ア 組織

社会分野は、教科専門の地理、歴史、公民の各分野、及び教科教育の社会科教育で構成されている。令和4年度末の教員構成は、教授8名、准教授3名、の計11名であり、分野的には地理2名（地誌学、自然地理学）、歴史3名（前近代日本史学、近現代日本史学、世界史学）、公民3名（法律学、経済学、宗教学）、社会科教育3名（地理教育学、歴史教育学、公民教育学）となっている。ただし、教科専門の公民に関しては中学校社会科及び高等学校公民科の教員免許選択必修科目である哲学、倫理学、社会学を担当する教員がおらず、さらに、教科専門の地理に関しては中学校社会科及び高等学校地理歴史科の教員免許選択必修科目である地理情報学、人文地理学を担当する教員がいない。このため、これらの分野については、非常勤講師でまかなっている状況である。

イ 教育の特色

社会分野は、社会科教育学と社会科（地理歴史科・公民科）に関する人文科学・社会科学・自然科学について、総合的・専門的な研究・教育を行い、それらを教育実践に有機的に関連づけることで先進的で高度な教科指導力を備えた教員を養成することを目的としている。本分野には、教科内容にかかわる地理学、歴史学、法律学、経済学、宗教学などの専門諸学、及び教科教育にかかわる社会科教育学の各研究室がある。本分野は、令和4年度から専門職学位課程に移行した。令和4年度は、修士課程と専門職学位課程の大学院生が共に在籍している。

修士課程の学生は、自らの研究課題に基づいていずれかの研究室に所属し、各指導教員のもとで修士論文を作成している。専門職学位課程の大学院生も、それぞれが研究課題を設定し、学校支援プロジェクトに取り組んでいる。教育・研究指導には分野の全教員が協力・連携して当たるという共通認識のもと、大学院においては修了までの間に4回の全体での構想発表会・中間発表会を実施している。学部生は3年次からゼミに所属し、卒業論文の作成に取り組んでいる。また、2・3年生を含めた全員参加の卒業論文発表会を開催している。このような個別及び分野全体での指導を背景に学部生及び院生の研究内容は、教科専門、社会科教育、教科内容の教材化や授業化という各視点で構成された学際的・総合的な研究に取り組んだ優れたものが多くみられる。

ウ 運営・活動の状況

i) 分野会議等の開催状況

本分野では、定例月1回の会議の他、必要に応じ臨時の会議を開催している。本年度は計15回のコース会議を開催した。

ii) 審議された主な事項

主な審議内容は、一般的な分野関連の事項、カリキュラムの改善、学校実習、学生の研究指導・評価、人事の計画、広報・定員充足の活動、入試関連の事柄、分野の教育・研究活動運営に関わる事項であるが、関連して上越教育大学社会科教育学運営に関連する事項を教員会議で審議した。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組としては、本分野修士生および関係大学の教員を対象にして大学案内、(大学院)社会分野案内パンフレット、上越教育大学社会科教育学会の印刷物等の送付を行うとともに、大学訪問等により個別に広報・宣伝を実施するなどして、受験生拡大に努めた。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

本分野が取り組んだ教育・研究活動の中でも次のようなものが特筆される。①「イ 教育の特色」で述べた大学院の構想発表会・中間発表会は、新型コロナウイルス感染症に配慮した十分に広い会場確保やZoom 遠隔開催も含め、予定どおり計四回実施、困難な状況下でも教育・研究指導に分野全体として取り組んだ。②本コースに事務局を置き、本コース構成員・修了者を中心に広く会員を有する「上越教育大学社会科教育学会」の活動。年度の総会・研究大会は、新型コロナウイルス感染症のため令和4年度はハイブリット形式で開催することとなった。元本学学長の佐藤芳徳先生を講演会講師に迎えて、充実した内容となった。また、学会誌『上越社会研究』第37号を刊行し学会研究活動と成果公開の継続を図った。③科学研究費補助金(B)採択研究等、各研究室・研究者により国内外に広がる活発な研究・教育活動が本分野教員により遂行された。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

優れた点としては、教育面では、上述のように困難な状況下でも卒業論文及び修士論文において個別指導と集団指導を組み合わせた高い水準の指導体制を確立維持できたこと、実践セミナー・実践場面分析演習では学部生及び大学院生との合同授業の成果の発表会を開催すると同時にその成果を冊子にまとめていること、教職

実践演習（教科等の指導力に関する授業「社会」）でも実践報告書を刊行していること等をあげることができる。研究面でも上述のように、組織として継続・発展的に取り組んでいることをあげることができる。今後の検討課題としては、大学院の定員充足があげられる。よりいっそう効果的な広報活動を検討していく予定である。さらに、社会分野の構想を実現するためには、定年退職による欠員をふくめ充足されていない教員の配置を実現することが重要な課題である。

（自然科学 数学）

ア 組織

数学分野の教員スタッフは、代数学2人（教授1人、教授1人）、幾何学1人（教授1人）、解析学1人（教授1人）、数学教育学1人（教授1人）の合計5人で構成されている。なお、代数学担当1名は令和4年度で定年を迎えた。

イ 教育の特色

教育の特色は、学部・大学院とも、数学分野の学生への教育だけでなく、全学の基礎教育に大きく貢献していることである。学部では、全専修・コースの中で教科内容構成コース（数学）を希望する学生は毎年のように多く、教科内容構成コース（数学）に所属した意欲ある学生に対して基礎を重視した良質な教育を行っている。大学院では、基礎学力及び応用力、意欲を問う入試を行い、入学した大学院生に対して、個々の実践的課題への積極的な取組を指導し、基礎学力と共に教育実践力を高めるための良質な教育を行っている。学部・大学院とも、各教員が授業、演習、リフレクション等において学部生・大学院生に対する魅力ある教育活動を展開することにより、教員として相当な学力と実践力を備え社会に貢献できる卒業生・修士生を教育界等に送り出している。

ウ 運営・活動の状況

令和4年度は15回の数学分野会議を開催し、数学分野教員の研究費配分、学部生、院生の指導教員の決定、数学分野教員が担当する授業科目・内容の精選などについて審議した。更に、中長期的に安定した運営を行うための人事に関する案件について集中的に議論した。大学院定員充足に関しては、各教員が自身の参加する研究会や学会における関係筋より、大学院への入学希望者の確保に努めた。この定員充足については重点取り組み課題としており、ホームページの内容を随時更新することにより積極的に情報を発信し、全国から大学院への受験生を確保できるよう広報活動を行った。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

算数・数学に関する教育課程全体について、学部・大学院改革後のより良い教育課程を維持するために日常的に検討を行っている。開設授業科目の相互連携を深めるために議論していくと共に、数学分野の大学教員として必要な知識・教養を深化させ、教員自ら積極的に深く広い知識を得ることに努力している。また、現在まで応用数学の専門家が長期にわたり欠員状態となっていることから、本学における「数理・データサイエンス教育」の実施にむけた基盤・体制を整備するためにも、数学的背景に精通した応用数学分野の教員の配置を検討する必要がある。

（自然科学 理科）

ア 組織

理科分野（以下、理科）は、教科内容学の物理、化学、生物、地学、および教科教育学の理科教育で構成されている。令和5年3月31日（令和4年度末）の教員構成は、教授5名、准教授3名合計8名である。分野別には物理（教授1名）、化学（准教授1名）、生物（教授2名、准教授1名）、地学（教授1名）、理科教育（教授1

名、准教授1名)である。ただし、教科内容学の物理に関しては電磁気学を担当する教員がおらず、化学に関しては物理化学を担当する教員がおらず、地学に関しては地質学および気象学を担当する教員がいないため、非常勤講師でまかなっている。

イ 教育の特色

理科には、教科内容学の物理、化学、生物、地学など、及び教科教育学の理科教育の各研究室があり、学部生は3年次から、大学院生は入学当初から、自らの研究課題に基づいていずれかの研究室に所属し、講義、演習、実験、ゼミナール等の指導を受けながら研究を行うとともに、理科の教材とその指導方法を学習する。その上で各指導教員のもとで、卒業論文・修士論文を作成している。これらを通じて、自然の事象に興味関心を持たせるとともに、積極的に科学研究に取り組む意欲や態度・能力を育て、その資質・能力を次世代の教育に生かせる人材の育成を目指している。

ウ 運営・活動の状況

(1) 理科の会議の開催状況

月ごとに定例の理科部会を開催し、教育・研究と分野運営等に関する計画立案や情報の共有を図っている。さらに必要に応じて臨時の会議等を開催、合計13回の会議を開催した。また、理科教授部会は、人事に関する必要性が出てきたときに開催した。

(2) 審議された主な事項

カリキュラムの改善、オムニバス授業の運用と実施、課題研究プロジェクト(学校実習)、学生の研究指導・評価、人事の計画、広報・定員充足の活動、入試にかかわる事柄など、理科の教育・研究に関わる事項について審議した。また、令和4年度から修士課程が教職大学院になるときのカリキュラムに関して審議した。

(3) 大学定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組としては、理科の修了生、関係大学の教員や学生を対象に大学の案内等を送付した。また、各教員個人のつながりのある他大学の教員に対して上越教育大学および大学院の理科の広報・宣伝を実施して、受験生拡大に努めた。

(4) 重点的に取り組んだ事項

特に、卒業研究・修士論文の研究指導については、年度初めに綿密な年間指導計画を立て、学生に周知させるとともに、教員が学生をサポートしながら指導に当たった。

さらに課題研究プロジェクト(学校実習)について、学校実習をさせていただく学校の希望内容を把握し、それらに対応することを目指した。すなわち学校現場と共同・連携して、学校教育の諸課題に応えること、大学院の学生として個々の課題の解決を目的として実施できるように取り組んだ。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

優れた点としては、教育面では卒業論文および修士論文において、理科全体としての指導と個別の指導を組み合わせた指導を実施していること、卒業論文や修士論文の一部は、学会等での発表を行っていること、実践セミナー、実践場面分析演習では、学部生と大学院生との合同で授業を開発し、その教材と模擬授業の発表会を行っていること、さらにCST養成プログラムの授業を提供していること等をあげることができる。研究面では、教科内容学、教科教育学を結びつけた研究ができるように取り組んでいる。言い換えると学問の固有性を重視しながら、学際的な研究ができることを目指している。さらにまた、理科のカリキュラム全体について、より良い授業となるように日々工夫を重ねている。

今後の検討課題としては、大学院の定員充足である。学校現場では、理科についての研究に興味を持ち、教科内容学と教科教育の双方を学びたいと考えている教員がいる。そうした現場教員の願いに応えることができ

るように検討していく。また大学院だけではなく色々な機会を通して、現職教員の希望に添えるように努めて行きたい。さらに理科の実践的指導力を身につけさせるためには、現在、充足されていない大学教員の配置が重要な課題である。

(自然科学 情報)

ア 組織

教科教育・教科複合実践研究コース・自然科学領域・情報分野は、令和4年度に新設された分野である。教員構成は、教授1人、准教授2人の計3人である。

新設初年度の入学者は無く、本分野の在籍者数は、1年次学生0人である。また、本分野と連携する機会のある学部は、令和6年度に履修上のコース・領域の再編により設置される予定である。

イ 教育・研究の特色

本分野は、教育の情報化等の学校現場における現在の喫緊の教育課題を理論的・実践的に探究する活動を通して、「情報教育、ICTを活用した教育、情報科教育」に関する高度な専門的知識と実践的指導力を備えた教員、学校におけるこれら教育のエキスパート、さらに教育改革をエビデンス・ベースで推進するリーダーとなる教員を養成することを目的としている。

本分野では、教育の国内外の喫緊の課題（数理・データサイエンス・AIに対応した教育、Society5.0を指向した教育の情報化の推進、等）への対応を図りつつ、学校・家庭・地域環境など学びのフィールドの実際を捉える学修を行うとともに、学校教育の課題解決に資するために、情報学の立場から教育研究を推進し、その成果を実践の場へと還元する支援に取り組んでいる。

令和6年度より始まる学士課程の教育活動に関しては、専門職学位課程の教育活動と連携を進めていく予定である。

ウ 運営・活動の状況

i) 会議等の開催状況

分野会議のオンライン化を積極的に進め、ほぼ完全に確立した。会議の報告事項については、オンデマンドで情報共有を行い、各種委員会等への会議出席後には、随時報告がなされる体制にある。また、会議の審議事項については、本分野の運営に関する重要度に応じて、電子メールによる協議、及び、テレビ会議システムを用いたリアルタイムでのオンライン会議による協議を使い分けて実施している。さらに、取扱注意に該当する情報等の伝達や審議については、臨時コース会議を対面により開催している。

ii) 審議された主な事項

新コース・領域・分野での取組、人事、カリキュラム等。コロナ禍そしてアフターコロナへの対応。令和5年度以降を戦略的に見据えた合理化・効率化・省力化向けの取組。学部学生、大学院生の学修を保証するための授業内容・方法・形態の検討。新分野事業の検討。

情報分野発足初年度のこともあり、運営体制及び教育研究体制に関する様々な部分で、新分野の入試やカリキュラム、学校支援プロジェクト（学校実習）の実施に関して、分野会議において審議し、検討を重ねた。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

新しく発足した情報分野を詳しく周知するためのパンフレットを作成した。また、大学主催の大学院説明会以外にも、学会への参加、研修会での講演、他大学の非常勤講師、等の機会において、自己紹介と共に情報分野のPRを行い、大学院の定員充足に努めている。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

情報分野スタッフの構成員は3名と学内で最も少人数の組織体制である。しかし、本学予算の逼迫等の説明を鑑みるに、今後当面の間はスタッフの拡充が見込めない状況である。そこで、教員3名体制で、本分野の教育・研究・社会貢献の活動を成り立たせていくために、大幅な合理化・効率化・省力化に取り組むこととした。令和4年度は、i) に述べたように、会議のあり方を改善した。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

今後の課題として、まずは、大学院の定員充足にも関わって、積極的に学外へ向けて情報分野の周知を行い、学生を確保することがある。

(芸術創造 音楽)

ア 組織

芸術創造/音楽分野においては、「音楽」では教授4人、准教授2人、特任教授1人の計7人で教育・研究・運営を行った。

イ 教育の特色

恒例の院生演奏会「アウトウンナーレ」には、論文系の大学院生も含めて多くの院生が積極的に参加した。また、修了演奏会が本学講堂で開催された他、上越教育大学・上越教育大学振興協力会主催「音楽分野教員と学生によるガラコンサート」、声楽や器楽などの実技ゼミ発表会、実技ゼミ生による演奏会も活発に行われた。

社会との連携においては、2022年に本学と連携協定を結んだ平安セレモニーが運営するザ・グランスイート聖パトリック・アルカディア大聖堂にて大学院生がリサイタルを開催するなど連携協定に基づいた活動を行った。

一方、学位論文について、学部では学部3年次の論文発表会を1回行った。大学院では1年次が音楽実践総合演習にかかる中間発表会（研究デザイン発表会）を1回、中間発表会（院生演奏会）を実施した。2年次・3年次においては、学位論文中間発表会、学位論文研究計画発表会、学位論文発表会を実施した。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

2022年度、15回の会議（今年度は全て対面）を行った。

ii) 審議された主な事項

コースの運営や入試業務の分担、コースからの委員の選出が主な審議内容であり、また諸報告を受け今後の改革を見通した議論が行われた。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院の定員充足に向けた広報活動の一環として、個々の教員の活動や大学院生による演奏会・論文発表会案内などの情報発信に努めた。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

昨年度に引き続き「ブリッジ」音楽での改善を重点的に行なったほか、教職大学院学校支援プロジェクト科目の運用等について取り組んだ。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

教員全員の努力により、全学の学生の芸術的な基礎力を向上させるために努力を続けている。コース内の学生は総合的な芸術性の向上が図られ、大学院生が個人的に開催したりサイタルでは多くの集客を得るなど顕著な成果があった。また、各教員がそれぞれの立場で地域文化のために尽力していることも継続した活動として優れている点であると考えられる。

全学的には、本学および上越教育大学振興協力会主催「音楽分野教員と学生によるガラコンサート」を開催す

るなど多く貢献しているとともに、教員は本学混声合唱団、吹奏楽団や管弦楽団等の文化系サークルの顧問として水準向上に努めている。

社会での活動においても、高田木曜会合唱団の指揮・指導（通年）、けやきの森ジュニア&ユース合唱団の指揮・指導（通年）、妙高市文化ホール、柏崎市文化会館アルフォーレなどの主催事業において指導・助言、上越交響楽団、北区フィルハーモニー管弦楽団の指揮・指導（通年）、令和4年度域学連携地域づくり応援事業（佐渡市）「芸能を媒介にした地域づくり・交流事業の提案」を行うなど地域音楽文化活動の向上に寄与し、その活動は地元紙にも紹介されている。

今後の検討課題としては、大学院の定員の充足のため、ホームページ内容の充実なども含め、さらなる広報活動、修了・卒業生との連携、他大学との情報交換・協力体制等により現状を改善することが課題である。

（芸術創造 美術）

ア 組織

芸術系教育実践コース「美術」では、教授3人、准教授2人、講師1人の計6人で教育・研究・運営を行った。

イ 教育の特色

「美術」は、美術科教育学、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論の分野からなり、これらの基礎的理論と技術、学校現場等での実践を踏まえ、教育実践力を備えた教員養成を目指すとともに、地域文化を盛り上げ、芸術活動を支援している。

学生の指導では、卒業・修了研究に向け、中間発表・卒業制作審査会（学部4年）、研修会・構想発表会（大学院1年）、中間発表会・修士論文発表会（大学院2・3年）を行い、継続的かつ計画的に行うことに努めている。また、「美術」の卒業・修了研究の特徴を生かし、「第39回卒業・修了研究展」（文化交流施設「ミュゼ雪小町」にて上越市と共催）を開催と研究成果報告書の発行を通して研究成果を発表し、社会に還元することに務めている。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

2022年度は、美術では12回の定例会議に加え、必要に応じて会議を開催した。

ii) 審議された主な事項

コースの運営や各委員会の報告に関する事項が主な審議内容である。特に教職大学院初年度であり、その運営（授業内容、学校実習 他）や学生指導の在り方等について検討を重ねた。また、感染症対策とそれに関する授業方法や改善に向けた情報共有なども行った。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

新型コロナウイルス感染拡大防止のための上越教育大学活動制限指針に従い、可能な範囲で大学訪問を行った。併せて、メール等による広報を各教員が行った。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

教職大学院における、学校支援プロジェクトの実施方法、アドバイザー教員の役割、フィールドワークやリフレクション、プレゼンテーション等の具体的な方法、報告書の内容や形式について検討を重ねた。また、新しい連携方法や協力校の検討も行った。他には、感染症対策や特別な配慮が必要な学生に関する指導に対応した、授業改善や試験方法の検討、ICTの活用に取り組んだ。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

「美術」の全教員が学部必修授業に関わり、全学部学生の図画工作・美術教育の指導力・実践力の向上のために努力を続けている。

社会貢献においては、「上越市美術展覧会」「妙高市四季彩展」の企画・運営、「ヨリ・ミチ図工室」（新潟県酒造組合高田支部との連携事業）の企画・運営、「笑顔をあふれるアート展」及び「てくてくつながれ！来☆on2003」展（地域活性化の包括連携協定に基づく現代アートイベント「なおえつうみまちアート」関連の展覧会およびワークショップ）の開催、「芸能科の記憶」展における「美術館アートまつり」（小林古径記念美術館の主催による展覧会でのワークショップ）の実施、「妙高四季彩芸術展グラフィック（ポスター・パンフレット等）」の作成、「新潟県児童生徒絵画・版画コンクール」・「新潟県中越教育美術展」・「妙高ジュニア芸術展」等児童生徒作品の審査、「ふるさとの風景展」（喜多方市美術館）の展覧会審査 など、地域の芸術文化振興に大きく寄与した。学生指導では、「全国漆喰鏝絵コンクール」佳作賞、「上越市美術展覧会」入選の成果を残した。

一方、大学院の定員充足に向け、広報活動や修了・卒業生との連携、他大学との情報交換・協力体制等、教職大学院への移行に応じて取り組んでいきたい。また、美術コースに所属する学部生も寡少であり、その現状を改善する具体的方策も検討しなくてはならない。

（生活・健康 保健体育）

ア 組織

本年度から「芸能深化 保健体育」は教職大学院へ移行され、「教科教育・教科複合実践研究コース 生活・健康領域 保健体育分野」となった。令和4年度（令和5年3月31日現在）の保健体育分野の教員数は、4人（国際交流推進センターおよび教科内容先端研究センターの兼務教員1人、健康教育研究センター兼務教員1人を含む）であった。

イ 教育の特色

「保健体育」は、体育科教育学、体育学、運動学、学校保健学の分野からなり、これらの基礎的理論と学校現場での指導実践を融合させた指導プログラムに基づいて、教育実践力に富む教員の養成及び地域の体育教育・スポーツ活動を支援した。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

保健体育では、11回および臨時等の分野会議を実施した。

ii) 審議された主な事項

分野の運営や各種委員の選出、学部生や大学院生の指導方針、入試業務や授業の方針と分担、各種委員会の審議事項及び次年度からの大学院改組に関わる懸案事項等について審議した。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組の状況については、関東甲信越等の国公立大学の大学訪問（Zoom 会議を含む）を行うとともに、学会・スポーツ大会等において本学大学院のPR及び大学院組織改革の内容についての説明を行った。また、他大学への訪問に加え、各種講習会や教員研修会において講師・指導者を務めた際にも大学院専門職学位課程の広報活動を行い、大学院の定員充足に努めた。その結果、新年度からの入学予定者は8名となった。さらに、協定大学との締結について全学的立場からも複数担当するなど、大学院生の定員充足に取り組んだ。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

「保健体育」の教育・研究は総合科学としての性格を持つ。そのため教科や領域を超えた、学際的な教育・研究を進める必要がある。実際の学校現場に向いて「実践場面分析演習」を実施したり、「教科内容構成特論」では、体育・スポーツの諸科学について教育実践を念頭に置き、教科内容として再構成を目

指し作成したテキストを元に、全教員による指導体制で授業を実施したりしている。学校現場を意識した実践的な教育・研究を推進できるよう取り組んでいる。しかし、ここ数年、教員退職者が生じた後に補充ができずに、教員一人一人の負担が増加している。大学教員の補充が課題である。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

各教員が所属する専門領域に関係する学会において、研究発表と論文の投稿を行った。これらの研究成果は、本学の公開講座や出前講座を通じて近隣の小・中学校や一般市民に還元された。また、上越市立体操場「ジムアリーナ」の活用に関するアドバイザー、上越市教育委員会健康づくり推進課・スポーツ推進課と共同した上越市オリジナルの健康運動プログラム教室「上越一健康運動プログラム教室（J-WELLNESS）」講師、新潟県立武道館開館に伴い開設された体力測定事業（高齢者向け）に関する体力測定プログラムの立案・提供、運動部活動指導員研修会講師（附属中学校、妙高市教育委員会、糸魚川市教育委員会）、新潟県幼児期の運動習慣アップ支援事業アドバイザーおよび指導員養成研修会講師、妙高市教育委員会幼児期運動指導アドバイザーおよび幼稚園教諭・保育士研修会講師、上越市教育委員会部活動地域移行推進委員会委員長、富山県教育委員会中・高等学校体育実技指導者講習会講師、日本体操協会全日本体操団体選手権審判員等として、地域の体育・スポーツ事業等に参画した。

今後の課題として、本年度からの教職大学院への移行に伴い、これまでの専門領域に関係する教育・研究に加え、教職大学院に所属する教員としての教育・研究の方向性を分野として検討すること、2名の教員の学内移籍および1名の教員の定年退職によって生じる業務負担増への対応が挙げられる。

（生活・健康 技術）

ア 組織

令和4年度（令和5年3月31日現在）は、教授3名、講師1名の計4名で教育・研究・運営を行った。そのうち、教授1名は、情報メディア教育支援センター兼務教員であった。

イ 教育の特色

「技術」は、技術科教育学、木材加工学、金属加工学、電気・電子工学、機械工学、情報工学、栽培学の分野に関する研究を通して、情報化や国際化に主体的に対応する能力や、地球環境保全に配慮した技術的な活動能力を持った人材を育成することを目指している。教員個々の授業においては、ポスト COVID-19 の時代に対応した教育活動を推進するため、オンラインによる教育と対面による教育を組み合わせたハイブリッド型の授業に加えて、感染症対策を行いながら技術に関わる実験・実習を実施している。

ウ 運営・活動の状況

i) 会議等の開催状況

審議運営事項が多いため、毎月開催しており、教育・研究と分野運営等に関する計画立案や情報の共有を図っている。さらに必要に応じて臨時の会議等を開催した。また、人事に関しては教授による会議を開催して、人事に関する内容を審議してきた。

ii) 審議された主な事項

各種委員会からの審議事項、課題研究プロジェクト（学校実習）、学生の研究指導・評価、人事の計画、広報・定員充足の活動、修士論文に関する事項、各種委員の選出などであった。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組の状況については、オンライン会議システム等を活用して、私立大学等の大学訪問を積極的に行うとともに、SNS や学会等において本学大学院の PR を行った。特に、私立大学の工学部・農学部、技術同窓会等への情報提供を強化するとともに、近年取り組んでいる北信越地方の大学、

職業能力開発大学校などを対象にしたオンライン大学院説明会などを実施するなど大学院生の充足率向上を図った。また、修了生の協力を得て共同研究や教育実践を行い、修了生とのつながり、交流を深めた。

「技術」のFacebook ページにおいては、大学や「技術」のイベント情報、学生生活の様子等から同窓会の情報まで幅広く取り扱っており、在校生、卒業・修了生及び入学希望者との交流広場を継続して提供した。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

「技術」では、学内研究プロジェクトなどを通して、新潟県立教育センター、地域の小中学校、地域の研究会、教員等と共に、プログラミング教育や学習指導要領への対応など主に技術に関係する喫緊の課題に対しての課題解決を積極的に行ってきた。地域貢献にも積極的に取り組み、周辺の小中学生を中心にプログラミングやものづくりの面白さ・楽しさを伝える活動、U16 プログラミングコンテスト上越妙高大会の開催、上越地域のNPO 法人主催のU30 プログラミングコンテストへの協力、青少年のための科学の祭典新潟県上越大会への協力、上越市少年少女発明クラブ講師、上越市緑の少年団の講師などを積極的に行い、日頃の研究成果の還元を行ってきた。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

「技術」では、大学院修士論文・学部卒業論文ポスターセッション発表会と課題研究プロジェクトの成果報告会を、「上越 技術と家庭科教育の会」及び技術同窓会と連携し、メタバース型のオンラインシステムによる形式で実施したことが優れた点であり、検討課題は、学部・大学院生の充足率の向上である。

(生活・健康 家庭)

ア 組織

令和4年度(令和5年3月31日現在)は、教授4人で教育・研究・運営を行った。

イ 教育の特色

「家庭」は、家庭科教育学、生活経営学、家族関係学、食物学、被服学、保育学及び住居学の各分野からなり、社会環境の変化により生じた複雑な生活課題を適切に解決することのできる、専門的な資質・能力を持った人材を育成することを目指している。教員個々の授業においては、教科内容構成に十分配慮したシラバスを作成した上で、講義時間内にアクティブ・ラーニングを取り入れるなどの工夫を加え、教育現場の要求に応えることのできる人材の養成を心がけた。特に、卒業研究や修士論文の作成においては、各々の教員が責任を持って指導にあたり、小・中・高等学校の教員にふさわしい思考力・判断力・表現力を兼ね備えた卒業生・修了生を輩出した。

ウ 運営・活動の状況

毎月、定例会議を開催し、大学改革や各種委員会における情報を共有するとともに、適宜、議題を提示・審議し、組織としての運営が円滑に進むように努めた。大学院の定員充足に関する取り組みとしては、各教員が非常勤先等において、可能な範囲で対面的広報活動を行った。また、日本家政学会誌(第73巻第9号)の裏表紙に入試日程等に関するカラー広告を掲載するとともに、SNSにおいては、分野としての活動報告や入試に関わる情報を提供した。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

活動の範囲や時間は限られていたものの、近隣への出前授業や各種研修講師の派遣、地域貢献事業の開催及び上越市教育コラボへの参加などを通して地域貢献も積極的に行ってきた。特に、令和4年度は、市民団体「あわゆき組」の開催する「あわゆき道中(高田の雁木町家界隈を散策するイベント)」の企画・準備等に協力し、

実際のまち歩きにも参加した。「上越発酵鍋開発普及実行委員会」の企画である上越の新名物「さかきん発酵鍋」の開発に関わり、学生目線のレシピを考案した。併せて、「上越新名物 さかきん発酵鍋を楽しむ会（本学共催）」においては、「さかきん発酵鍋」の健康効果についてプレゼンテーションを行った。また、昨年度に引き続き、オンラインを通じて、岩手県の小学校・中学校教員を対象とした消費者教育研修会の講師も務めた。

分野においては、学生の家庭科教員としての資質能力を高めることを最優先に考え、カリキュラムの改革等に取り組んでいる。今後は、教科内容構成や地域貢献の視点に立った教育体制の整備が急務になると思われるため、地域貢献へのさらなる進展や教員の充足が課題といえる。

(教科横断・総合学習 教科横断・探究的学習)

ア 組織

令和4年度（令和5年3月31日現在）の教科横断・探究的学習分野の教員数は、5人（学校教育実践研究センターの兼務教員1人、健康教育研究センター兼務教員1人を含む）であった。

イ 教育の特色

「教科横断」は、特定の学問分野にとらわれず、「総合的な学習の時間」から「各教科」へつなぐ指導プログラムに基づいて、横断的・探究的な視点で学習過程を構想し、よりよい学びを生み出す「学習材」「学習活動」「ICTを活用した指導法」等を協働で開発・実践・省察しながら、学習観および授業観を更新し続けられる教員を養成する。

ウ 運営・活動の状況

i) コース（分野）会議等の開催状況

教科横断では、13回の分野会議を実施した。

ii) 審議された主な事項

分野の運営や各種委員の選出、大学院生の年間行事日程、授業分担、入試業務や授業の方針と分担、各種委員会の審議事項、広報活動等について審議した。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

大学院定員充足に関する取組の状況については、県内・隣県の大学訪問を行い、本学大学院のPR及び大学院組織改革の内容についての説明を行った。また、教員が依頼された各種研修会等において講師をした場合も広報活動をあわせて行い、大学院の定員充足に努め、前年を大きく上回る受験生を獲得し、入学に繋げた。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

「教科横断・探究的学習」では、学校支援プロジェクトを通して、近隣の小学校において、教科等横断的・探究的な学習づくりを提案した。また、学校現場の喫緊の課題である特別な教育的ニーズのある児童の学習支援や、GIGAスクール構想に基づき1人1台配布されたタブレットを用いた先鋭的な授業の提案を実施した。地域貢献としては、近隣の小学校の学校運営協議会委員や、上越市教育委員会の委員、各種講習会の講師などを積極的に行い、専門的知見の還元を行ってきた。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

本分野は、令和4年度に新設され、新入生3名でのスタートとなった。教育面では、各教員旧所属組織のゼミ生と新入生との連携を円滑にし、学校実習を協力的に実施することができるように支援した。研究面では、各教員が所属している国内外の学会等において、積極的に論文の投稿を行った。

本分野の強みは、小学校で現職経験がある教員から、国際的な学会等で活躍する教員まで、多様なバックグラウンドを持つスタッフが、それぞれの強みを生かして協力して教育に当たっている点にある。このことが大学院生の学校実習指導の際にも生かされ、実習の現場指導では学校側と院生との関係構築を援助し、院生個々が持つ実習での課題遂行をサポートできた。また、実習の経過報告や成果を発表する全体リフレクションでも、院生の研究遂行面で不足する知見を指摘し、学校実習における理論と実践の往還を実現させた。

今後の課題として、引き続き大学院への受験者獲得が挙げられる。これまで受け入れてきた院生を丁寧に指導することと、各院生の出身大学の教員との連携を強固にすることが挙げられる。また、学内の様々な分野の教員との連携を継続し、教科等横断的な教育・研究活動が実施できるようにすることが課題となる。

(教科横断・総合学習 グローバル・総合)

ア 組織

大学院学校教育研究科専門職学位課程教育実践高度化専攻教科教育・教科複合実践研究コース（教科横断・総合学習領域／グローバル・総合分野）は、令和4年度より発足した新分野である。グローバル・総合分野発足の令和4年度は、新入生14人を迎えた。また、教授6人、准教授2人、計8人の教員構成でコース運営を行った。

イ 教育の特色

グローバル・総合分野は、国際理解教育・日本語教育、ICT・プログラミング、生活科・総合的な学習の三つの学習領域で構成され、持続可能な社会の創り手の育成に向け、SDGsを手掛かりに教材・カリキュラム開発、カリキュラム・マネジメントの理論を踏まえて、学校の教育課題を創造的に課題解決する新人教員とモデルリーダーとなる教員を養成することを目的とする。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

グローバル・総合分野は月1回の会議開催を定例とする他、必要に応じて随時、会議及び情報交換会を開催し、教育研究に関する事項を協議し決定したり、情報共有・共通理解を図ったりしている。

ii) 審議された主な事項

運営体制及び教育研究体制、院生の教育研究環境の整備等について、院生の日常の様子を見ながら、順次調整を行った。学校支援プロジェクト（学校実習）等の実施に関して、グローバル・総合分野会議で審議し検討を重ねた。特にグローバル・総合分野は、令和4年度の大学院改革に伴っての新設の領域・分野のため、令和4年度及び令和5年度の教育研究活動全体を見通し、あらゆる事項について、詳細に検討・審議した。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

グローバル・総合分野では、大学院定員充足に向けて、主に次の6点を中心に取り組んだ。

- ・ 協定校との連携

サテライト講座の開設、大学訪問説明会の実施を行った。

- ・ パンフレットの作成

グローバル・総合分野のパンフレットを作成し、積極的にPR活動を行った。

- ・ クリアファイルの作成

グローバル・総合分野のコンセプトを記載したクリアファイルを作成し、パンフレットと共に教育現場に配付した。

- ・ FACEBOOK の開設

FACEBOOK を開設し、グローバル・総合分野の取り組みについて積極的に発信した。

- ・ 研究成果の積極的発信

学会発表や研究出版物を通じて、教員自らの研究成果を継続的に発表・発信した。

- ・ 国際交流ファシリテーター事業の活用

国際交流ファシリテーター事業に参加している大学（新潟国際情報大学、敬和大学、新潟県立大学、新潟大学）の学生及び教員に対して、日常の活動を通じて、グローバル・総合分野の特色を説明した。

- iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

今年度は、学校支援プロジェクトの体制づくりに丁寧に取り組んだ。一人一人の院生のニーズを把握し、最も適切な学校への依頼とチームづくりを心掛けた。特に、留学生の学校支援プロジェクトは初めての試みであったので、教員の指導体制を工夫しながら、受入校と連絡を密にしながら進めた。

結果的に、初年度のグローバル・総合分野の学校支援プロジェクトは、受入校のご支援をいただきつつ、所期の目的を達成することができたと考える。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

教育研究指導に関しては、グローバル・総合分野教員の多様な専門性（国際理解・日本語、ICT・プログラミング、生活科・総合的な学習）を有機的に結び付けることで、院生と学校現場、地域のニーズにこたえることができた。

今後の課題として、令和5年度に向けての体制づくりを進め、令和5年度以降のグローバル・総合分野の教育研究の体制を維持することと質保証に務めることが挙げられる。そのためには、グローバル・総合分野の院生の声に丁寧に耳を傾け、評価情報を収集し、次年度以降のカリキュラムの見直しや、シラバス等の改善に反映させたい。

③ 発達支援教育実践研究コース

(特別支援教育)

ア 組織

発達支援教育実践研究コース特別支援教育領域は特別支援教育実践研究センター（以下、センター）と一体となって運営されており、特別支援教育領域の全教員がセンターの兼務教員となっている。また、専門職学位課程先端教科・領域開発研究コースの一部の授業を兼務担当している。令和4年度は教授6人、准教授4人、講師1人の計11人体制で領域運営を行った。

イ 教育の特色

本領域は、特別支援教育に関する高度な専門的知識と実践的指導力を修得させることにより、特別な教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して適切な指導と必要な支援を行うことができる教員を養成することを目的としている。所属教員の専門分野は特別支援教育に関連する教育学、心理学、生理学、指導法など多岐にわたっている。今年度の授業科目として、特別支援学校教諭専修免許状、同一種免許状を取得するために必要な科目を開設した。視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱の5領域全てに加え、言語障害、情緒障害、重複障害、発達障害に関する科目も開設した。特に、講義による専門的な知識の提供とともに、センターや学校において高度な臨床教育・研究の機会を数多く提供した。令和4年度入学者より大学院修士課程から専門職学位課程へと移行し、地域の特別支援学校、小・中学校等をフィールドとする学校支援プロジェクトにも取り組んでいる。

ウ 運営・活動の状況

i) 領域会議等の開催状況

原則として毎月第2及び第4水曜日の午前に、対面またはオンラインで領域・センター会議（領域とセンターの合同会議）を開催した。令和4年度においては、計24回開催した。

ii) 審議された主な事項

院生募集、入学試験、カリキュラム、学生指導、研究プロジェクト、人事、予算、地域貢献、領域（人文棟8階）・センターの施設・設備、センターの運営、センターセミナーや特別支援教育実践研究会の運営等について審議した。また、令和5年2月、「早期履修プログラム」において、エントリー希望のあった学部2、3年次生に対して、成績状況や面接による選考を行った。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

従来実施してきた入試案内の送付や大学訪問に加え、定員充足に向けた以下の年間計画を策定し、その実現に向けて取り組んだ。

- ① 領域の特徴が分かりやすい内容の領域パンフレットを作成・活用した。
- ② 過去に受験生があった大学に、領域パンフレットやチラシ等入学案内を送付した。
- ③ 全国の特別支援学校や教育委員会特別支援教育担当部署に領域パンフレット等の入学案内を送付した。
- ④ 領域や特別支援教育実践研究センターのウェブサイトを充実させて広報活動を行った。
- ⑤ 研修会・講演会及び他大学での集中講義等において、領域パンフレット等を配布した。
- ⑥ 特別支援教育の専門誌に受験案内を掲載した。
- ⑦ 教育、福祉、心理系の学部学科を有する私立大学を中心に、教員全員が2校以上を目標としてオンラインや対面による積極的な大学訪問を行った。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

領域・センターの運営に関わる6つのワーキンググループ(入学試験、将来構想、センター、人事、学校

実習・教育実習、センター基礎設備)を設けて、各課題について改善に取り組んだ。領域が一体となって運営しているセンター主催による外部講師を招聘してのセンターセミナーや現職教員(センター研究員)の研究発表の場である実践研究発表会の実施、教育相談の実施、独立行政法人教職員支援機構委嘱事業を活用した附属小学校通級指導教室の協働運営等を行った。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

特別支援教育に携わる教員の養成・研修や関連分野における研究成果への期待に応じるために、特別支援教育実践研究センターとの緊密な連携の下、学内における多数の他専攻の院生を含む特別支援学校教員免許状取得希望者への教育とともに、コロナ禍にあつて実際は中止となったものもあるが、オンラインによる実施を含めて免許法認定講習や免許状更新講習、各学校における校内研修等学外における社会の様々なニーズにも対応できる体制を整えてきた。また施設・設備面では、人文棟8階の改修工事が完了し、専門職学位課程への移行に伴う領域の院生室や少人数で活用できる演習室の整備が行われるなど修学環境が整った。

検討課題として、これら多くのニーズに対して引き続き対応しつつ、専門職学位課程のミッション及び特別支援学校一種・二種免許状コアカリキュラムを踏まえた特別支援教育を担う教員養成に対応できるように、特任教員を含む教員組織を計画的に整備していくことが必要である。また、竣工後30年以上を経過した特別支援教育実践研究センターの施設・設備の改修・整備を推進し、臨床教育・研究のさらなる充実を図っていくことも必要である。

(幼年教育)

ア 組織

幼年教育領域は幼年教育学、幼年心理学、保育内容、児童福祉の4つの研究分野で構成されている。専任教員は教授1人、准教授2人、助教1人の構成であったが、8月1日付で1人が准教授より教授へ昇進した。

イ 教育の特色

本学附属幼稚園を主なフィールドとした臨床的、実践的な研究指導を特色としている。各教員の専門性を活かしながら幼年期における教育・保育研究を総合的に推進し、本学の幼稚園教員養成・保育士養成を中核的に担っている。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

幼年教育領域会議は隔週を定例とし、計25回開催した。状況に応じてオンライン開催とし、また、緊急議題については、随時のメール審議や臨時ミーティングにおいて検討した。

ii) 審議された主な事項

昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染状況の把握と対応に関する審議を進めた。

通常業務以外の事項については、本年度が専門職学位課程への移行初年度であり、また学部の課程再編を間近に控える年であったことから、課程運営に関する内容が比較的多くを占めた。

大学院については、学校支援プロジェクトの計画策定、準備から学校支援フィールドワーク・プロジェクトセミナー実施に至るまでの各局面で、それぞれの作業の形態・内容について検討した。専門職学位課程が修士課程との併行実施となったため、従来の修論構想発表会・プレ発表会・最終発表会のスケジュール、実施方法の調整等を含めて論議した。また、入試方法の改善に関する審議も進めた。

学部については、令和5年度新設予定の幼稚園教職免許科目のほか、学部・大学院接続推進プログラム、教学マネジメントをベースとした新課程等について審議した。また、コロナ禍のもとで随時求められた保育実習・保育実習指導のスケジュール調整や実習生への個別対応、4年次より3年次に移行済みの幼

稚園専修教育実習の事前指導の検討、保育士課程運営に係る諸課題への対応に関する審議を行った。なお、人文棟改修工事が続いていたため、非常勤講師の授業実施場所が問題となった。

このほか、本領域の教員選考基準、改修後の院生室・共用演習室の物品購入・管理や使用に関する申し合わせ等について審議した。例年通り毎回、領域学生に関する情報共有の機会も開いている。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

広報活動として学生募集リーフレットを公私立 294 大学等に送付した。また、連携協力校 1 大学において大学院説明会を実施した。幼年教育領域のフェイスブックを運営するとともに、院生の協力を得て入学予定者へのレター送付を行った。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

本領域は 4 人の教員が緊密な連携のもとに各種業務を分担して効率的に行い、本学における幼稚園教員養成・保育士養成の中核的な役割を果たしてきている。本年度は、コロナ禍がなかなか収束に至らない中、学士課程学生・修士課程学生・専門職学位課程学生の 3 者にそれぞれ異なる流れで指導しなくてはならない困難な状況に置かれたが、各方面からの協力を得ながら対応していくことができた。

初年度の学校支援プロジェクトは、附属幼稚園との連携によって一定程度の成果をあげることができた。しかしながら、これまでの修士課程における指導体制と内容、研究の蓄積をどのように活かしていくかについては吟味を要し、完全実施の来年度以降は、連携と実践のさらなる充実が求められる。また、実績を重ね、大学院広報の内容にも繋げる必要がある。

学部の保育者養成については、保育に対する否定的なイメージが報道される昨今、本学で幼小一種免と保育士資格を得て巣立ち、各地域で有為な保育者となることが期待される学生たちに、どのように幼児教育・保育の意義と魅力を伝え、学習と研究に不可欠な環境整備を行い、明るい見通しとともに送り出していくかが切実な課題となっている。

(学校ヘルスケア)

ア 組織

発達支援教育コース学校ヘルスケア領域は、令和 4 年度は教授 1 人（保健管理センター兼務教員 1 人）、准教授 2 人（芸能深化領域（保健体育）兼務教員 1 人）の計 3 人体制でコース運営を行った。

イ 教育の特色

本コースは、子どもの発達及び学校における健康に関する諸科学を統合した教育・研究を通じて、広い視野に立った学識を備えた人材や教育実践を創造的に推進できる人材を養成することを目的としている。所属教員の専門分野は栄養学、養護学、体力医学など多岐にわたっている。今年度の授業科目として、養護教諭専修免許状と栄養教諭専修免許状を取得するために必要な科目を開設した。

ウ 運営・活動の状況

i) 領域会議等の開催状況

令和 4 年度においては、新型コロナウイルス感染対策として、基本的にはメール会議を中心に運営・活動を実施した。また、必要に応じて臨床研究棟 2 階演習室 5 において領域会議を開催した。

ii) 審議された主な事項

院生募集（協定校をはじめ関連分野の学部を有する大学への領域説明等を含む）、入学試験、カリキュラム、学生指導、研究、人事、予算、地域貢献等について審議した。また、令和 2 年 4 月に開設された健康教育研究センターの運営について情報共有をした。また、令和 4 年度からの大学院改革を経て、学校ヘルスケア領域の将来構想についての検討を継続して実施し、人事計画とともに、教職大学院における養護

教諭や栄養教諭を対象とした授業科目の運営等について情報共有・連携を行った。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

従来実施してきた入試案内の送付や協定校をはじめとする大学訪問に加え、定員充足に向けて以下の項目に取り組んだ。

- ① 領域パンフレットを作成・活用する。
- ② 過去に大学院生を受け入れた大学に、領域パンフレットやチラシ等入学案内を送付する。
- ③ 領域のウェブサイト（SNSを含む）を充実させて広報活動を行う。
- ④ 研修会・講演会及び他大学での集中講義等において、領域パンフレット等を配布する。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

令和4年度に実施された大学院改革における領域の特徴を強く打ち出したカリキュラム編成を幅広く広報を実施した。また、令和2年4月に開設した健康教育研究センターには領域全員が兼務しているため、新センターの運営や活動について情報共有をした。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

健康教育や食育に関する地域連携を積極的に推進し、研修会や勉強会の講師をはじめ、学校教育実践研究センターが主催する自主セミナー等の実施、免許状更新講習、各学校における校内研修等を通して地域との連携を深めた。

令和4年度の大学院改革における養護教諭と栄養教諭と保健（中・高）の専修免許科目の教育内容についてわかりやすく広報や情報提供を継続した結果、次年度の入学希望者が過去最多となり、これまでの継続的な広報の成果を示すことができた。今後の検討課題は、継続して入学希望者を確保すること、そのために、所属教員の教育、研究、地域貢献等を広く展開していくことである。

④ 心理臨床研究コース

(心理臨床)

ア 組織

令和4年度の心理臨床研究コースは、7人の担当教員で運営された。教育研究指導體制は、教授3人（うち特任教授1人）、准教授3人、講師1人であった。

イ 教育の特色

本コースでは、日本臨床心理士資格認定協会の第1種認定を受けた臨床心理士養成に加え、令和元年から心理職の国家資格化された公認心理師養成カリキュラムを開始し4年目に取り組んだ。教育、保健医療、福祉、司法・矯正、産業・労働の主要5分野における個人や集団、組織の心理面での理解を深め、多様な困難さや課題解決に関する実践と解決方法の開発研究とともに、それぞれの強さや長所の伸長と成長を促進する基礎および臨床研究を行っている。特に教育分野での幼児や児童生徒だけでなく、教員のメンタルヘルスや多職種連携、ストレス理論やポジティブ心理学を活用した心理教育活動などの教育研究を進めている。

また、学部（臨床心理学コースおよび心理臨床コース）の卒業生においても、本学大学院心理臨床研究コースに進学し、心理面での専門性の高い教員やスクール・カウンセラーを輩出する体制化が整っており、6年間を通じた教育も提供している。

本コースの教育では、大学院修士課程および学部生に対して研究セミナーや実践セミナー〔心理臨床〕をはじめとしてさまざまな学習機会のなか、理論や知識だけでなく、実践を通じた研究指導を行っている。加えて、大学院修士課程の学生に対しては心理教育相談センターでの心理実践実習や臨床心理実習の指導とともに、附属学校園において、幼児から児童生徒の心理面での理解と対応を行い、教育分野での専門性を高める教育を行っている。臨床心理士資格取得希望者の学外実習に加え、公認心理師資格取得希望者は学外での必修実習である医療機関での心理実践実習と、教育分野、福祉分野、司法・矯正分野あるいは産業・労働分野での心理実践実習を行うため、実習先の拡大をはじめカリキュラムの充実化を図っている。

ウ 運営・活動の状況

i) コース会議等の開催状況

定例のコース会議は、毎月2回、火曜日に開催している。教育の質の向上に向けたカリキュラムの検討を中心として、学生の支援や、心理教育相談センターを利用した臨床心理実習および心理実践実習の運営方法等、コースの運営に関する審議が継続して行われた。また、公認心理師養成のための教育課程の4年間の振り返りとともに、学外実習手続きや調整の充実化のために、学校実習課との業務内容の連携体制も新しく今年度取り組み、次年度の実習の充実化を図っている。令和4年度は、COVID-19 感染防止に伴う中断や変更はなく、各実習先での実習を行うことができています。

ii) 審議された主な事項

全学的な検討事項等についての議論はもとより、特に次の点について検討した。①学部臨床心理学／心理臨床コース並びに大学院心理臨床コースの教育の質の向上のためのカリキュラムの検討、②大学院臨床心理実習および心理実践実習（本学心理教育相談センターにおける実習と、近隣の施設・機関等を利用した外部実習）での指導経過や課題の検討、③公認心理師の養成のための教育課程の構築と修士課程2年目の心理実践実習の評価と検討、④次年度の学部4年生を対象とした心理実習の実習先の確保と実習内容の検討、⑤コース内人事管理、⑥COVID-19 禍での教育、⑦今後の教育研究指導體制。

iii) 大学院定員充足に関する取組の状況

修士課程心理臨床研究コースの受験者は、例年、定員の2倍程度の競争率を維持しており、他の大学の併願者も多い点も考慮し、定員よりも多くの合格者を出している。公認心理師と臨床心理士の2資格取得

可能なカリキュラムの4年目となった令和4年度は、受験者の多くが、臨床心理士と公認心理師の2資格取得を希望していた。公認心理師資格取得のための大学院受験には、学部での指定25科目履修が必修になっているが、学部の本コース以外の学生も25科目の履修を行うことができ、入学前から本コース大学院に進学し心理臨床専門職を志望する希望学生が増加している。そのため、学部2年次の本コースおよびカリキュラム説明会を全学学生対象に開催している。加えて、本コースの特色等を全国に広く周知するために、本コースおよび心理教育相談センターのホームページを充実させ、大学説明会等で定員増加のための広報を行っている。既に国内の大学間連携協定締結機関とは、情報提供や志望学生への対応などを行い、大学間連携も進めている。

iv) 重点的に取り組んだ課題や改善事項等

公認心理師および臨床心理士養成のためのコースとして、カリキュラムのなかでも、特に心理実践実習に関する検討と調整を行った。加えて、学部では学年進捗とともに新科目の開講をしてきたが、令和3年度で25科目すべての科目が開講された。オムニバス科目は担当教員間での調整を行い、それ以外の科目では、コース全体の一貫性を保ち重複が生じないようにするため、講義内容の確認を行い、各科目の連続性を高めることを行った。また、学内実習施設である心理教育相談センターにおける臨床心理実習および心理実践実習の運営方法や、指導内容についても何点かの改善を行った。特に今年度は、遠隔システムを導入しICTを活用したコンサルテーションや研修会などを含めた地域貢献活動も行える体制化を整え、さらなる充実化を図っている。心理教育相談センターでの臨床心理実習および心理実践実習については、今後も地域への質の高い臨床サービスの提供とともに、大学院生への指導体制のより一層の充実を図っていく。

エ 優れた点及び今後の検討課題等

本コースは、毎年、学部生約6-9人、大学院修士課程生約18-20人、博士課程生1-2人の教育研究指導を、7人の教員で行ってきた。教員の教育研究指導の内容としては、卒業論文や修士論文の指導の他に、修士課程の学生の心理実践実習と臨床心理実習の指導にかかる高い比重が続いている。具体的には、全教員が毎週、各学生に3-4時間程度の指導時間に加え、学外の各実習先の定期的巡回指導が求められ、計週10時間以上を指導時間に充てる必要があるとなっている。その他にも、心理教育相談センターに来談するクライアントに対する心理療法や心理教育相談を行うとともに、新しい実習先の拡大にも取り組むなど、業務が多忙な状態である。このような状況で、個々の教員は自らの研究活動や、地域における相談活動や学校等の支援活動を行ってきている。したがって、学生の教育研究指導や、心理教育相談センターの業務が実質的に担当できる教員を補充することが望まれる。

今後、公認心理師や臨床心理士資格を有する教員を継続して輩出することによる教育界への貢献はもちろんのこと、新潟県内および周辺地域の学校教育を支える教育分野の心理専門職の養成、学部の臨床心理学/心理臨床コースと大学院修士課程心理臨床研究コースの6年を通じた公認心理師および臨床心理士養成のために教育課程と実習指導体制の整備、そして教育の質の向上と教員の負担軽減の検討などが喫緊の課題である。